発達外来 よろず相談室 ～小児リハビリテーションのお話

村上総合病院小児科発達外来　和田有子監修

小児リハビリテーションは多くは生まれつきの病気や障がいに対して行うもので、「失ったものを取り戻す」イメージの大人のリハビリテーションとは違って、「発達や成長を手助けする」、あるいは「その子の凸凹をより良い方向に伸ばしていく方法を見つける」ものです。対象は、脳性麻痺、脳炎・脳症、二分脊椎、頭部外傷、視覚障害、聴覚障害、精神遅滞、注意欠如多動症（ADHD）、自閉症スペクトラム、発達性協調運動障害、学習障害（LD）、コミュニケーション障害などがあります。

≪どんな人が関わるの？≫

骨・筋肉の「動き」を中心に働きかける PT（理学療法）、しゃべる、食べるなどの「首から上」を中心に働きかける ST（言語療法）、日常生活活動（道具を使う、遊ぶなど）を中心に働きかける OT（作業療法）と、それらを軸に医師、心理士、義肢装具士、看護師など、様々な職種と家庭とのチームワークで、リハビリテーションは行われます。さらには、医療と教育（園・学校）と福祉（行政）、家庭が連携を取って理解し、支援するネットワークが必要です。

≪リハビリテーションでは何をやるの？≫

リハビリテーションでは ①評価（診断する）
②計画・調整
③治療・訓練（やり方を伝える）
④家庭や集団の場で実践する

ということを繰り返します。①～③はセラピスト（PT、ST、OT、心理士）が中心になります。

≪リハビリテーションを受ける際の大切な心構え≫

リハビリテーションは「医療やセラピストが何とかしてくれるもの」として受けてはいけません。家庭や園や学校といった日常生活の場（いつも居る場所）で出来ること、行えることをやり続けることが大切だということを知っていてください。医療やセラピストは、そのガイド役に過ぎないのです。ですから、ダラダラと長く続けず、一定期間（例えば半年）毎に継続するか卒業するかの検討を行うことも大切です。

≪実際の例で考えてみよう～寄ってたかって働きかける≫

例えば「食べる」ということに関してのリハビリテーションでは、PT、ST、OT がどう関わるかというと、

（PT）呼吸が安定している・意識がはっきりしている ⇒ （ST）食べ物という認識ができる
⇒ （PT・ST）良い姿勢をとる ⇒ （OT）食べる道具を使う ⇒ （ST）噛む・飲みこむ

という分業が考えられます。もちろん、医師もこれに関わってきます。チームワークで一つのことを成功に導くのですね。